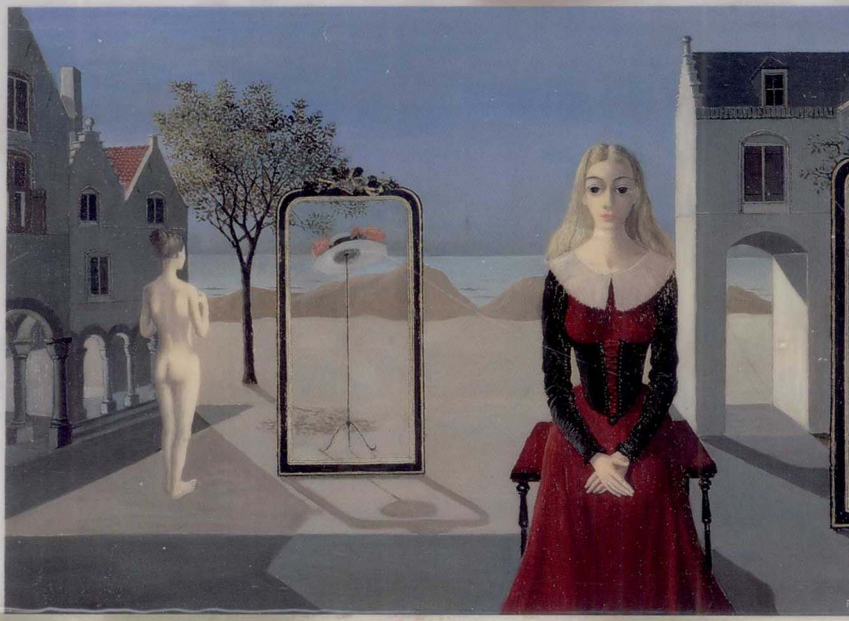
筒井康隆



精神の深淵に迫る
禁断の長篇小説

ハプスブルカ

筒井康隆

中央公論社

パプリカ

一九九三年九月二〇日初版発行
一九九三年一〇月二〇日三版発行

著者　筒井康隆
発行者　嶋中鵬二
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替 東京二-三四
印刷所　三晃印刷
製本所　小泉製本

Printed in Japan ©1993 CHUOKORON-SHA, INC.
Yasutaka TSUTSUI
ISBN4-12-002236-6

パプリカ

装幀　渡辺和雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一部

一

時田浩作が理事室に入ってきた。彼の体重は百キロ以上あった。理事室の中が暑苦しくなった。財団法人・精神医学研究所の理事室に常駐している理事は、時田浩作と千葉敦子のふたりだけだった。机は五つ置かれていた。ふたりの机は奥の窓際に並んでいた。理事室は、職員室とつながっていた。境のガラス戸はいつも開け放されたままだったので、理事室はまるで職員室の一部のように見えた。

所内の売店で買ってきたサンドウイッチとコーヒーを、千葉敦子は自分の机の上にひろげたままだった。食欲がなかった。長いあいだ同じ昼食が続いていた。所内には入院患者と職員が共用する食堂もあったが、出される定食は身の毛のよだつまずさだった。食欲がないため肥らずにすみ、毎日のようにテレビ局から出演依頼のくる美しさが損なわれることがないのはさいわいと言えたが、あいにく治療に利用する以外は自分の美しさにも、テレビ局にも彼女は関心がない。

「伝染性の分裂病だというので職員たちに恐慌が起っているよ」時田が巨体を敦子の隣りにおろしながら言った。職員のひとりが関係妄想にとりつかれたのだった。「スキャナーやリフレクタ

ーにさわるのを、みんないやがってる」
「困ったわね」敦子自身、そんな経験なら何度もしていたし、昔から精神病医は分裂病に罹ることを恐れるものと決まっていた。ヘルペスみたいに粘膜を通して伝染するのかもしれないと口走る医師までいた。精神内部を走査し観察するスキャナーやリフレクターなどのサイコセラピー機器が使用されはじめて以来、その恐怖はますます現実味を帯びたものになっていた。「患者との同一化を嫌ったり『転嫁』したりする職員ほどかえってそうなるんです。そんな体験をすることでかえってセラピストとしての自己治療になるのに」
「転嫁」とは、治療者が患者と人間的な絆を結べない時、それを相手の精神病のせいにしてしまうことで、それがほんの二十年前までの分裂病診断の基礎だったのだ。
「また、きんぴら牛蒡と鶏の幽庵焼きか」母親が作った弁当の蓋をあけて、時田は不満げに分厚い下唇を突き出した。時田は所員用マンションに母親とふたりで住んでいた。「食う気がしないなあ」
　時田の大きな弁当箱の中を見て敦子の食欲が触発された。海苔弁当に違いなかった。弁当箱の底に飯を薄く敷き、その上に醤油をしみこませた海苔を一枚敷き、さらにその上に薄く飯を敷くという手順を何度かくり返した昔なつかしいあの海苔弁当なのだった。その弁当箱の中には敦子の恋い焦がれる家庭的な味覚、母親の味がぎっしり詰まっているように思えた。もともと彼女は少食ではなかったのだ。敦子は飢餓さえ自覚した。
「じゃ、わたしが食べてあげます」決然としてそう言い、言う前に敦子は手をのばしていた。竹で編んだ時田の大きな弁当箱を横から両手で鷲づかみにした。

時田の反応も早かった。敦子の手の上から弁当箱を押さえこんだ。「いいよ」
「欲しくないって言ったでしょ」指さきの力には自信があった。敦子は弁当箱をむしり取ろうとした。
この弁当以外に時田の食欲と味覚を満足させられる食べものは所内になかった。彼もけんめいだった。「いいったら」
「おやおや」所長の島寅太郎が顔をしかめ、ふたりの前に立っていた。「ノーベル医学生理学賞候補ナンバー・ワンのおふたりが、お弁当の取りあいですか」いくぶん悲しげに彼はそう言った。
島寅太郎は所長室のデスクを離れ、職員室をうろうろ歩きまわって誰かれなしに話しかける癖があった。うしろから突然声をかけられてとびあがる職員もあり、心臓に悪いというので評判が悪かった。
歪めた口で厭味たっぷりに所長からそう言われても、ふたりは弁当箱から手を離さず、無言で揉みあい続けた。島はしばらくのあいだ、非常に憂わしげにその様子を眺めてから、天才に子供っぽさがつきものであることを思い出したという納得した表情で、小さく二、三度うなずいた。
「千葉さん。あとでちょっと所長室へ来てください」つぶやくようにそう言いながら島所長はうしろ手をして丸めた背中を見せ、いつものようにぶらぶらと職員室の中を歩きまわりはじめた。
「しかし、治療者ともあろうものが、患者と似たような妄想観念を持つのはよくないんじゃないかな」しかたなく弁当の半分を蓋にとりわけながら時田浩作は言った。「津村君は患者の超越論的な自立の試みを、経験的な自立の試みだと誤解したんだ。患者の家族がよく、患者と似た妄想観念を持つが、あれと同じだよ」

それだと尚さら危険だった。それは患者の眼に一種の欺瞞として映っているに違いなかったからだ。患者が自分に理解を示す家族に対して欺瞞を感じるのと同じだった。津村という職員を分析しなければ、と、敦子は思った。

理事室には食事に戻るだけだった。診療室に隣接した敦子の研究室はまるでコックピットのようにＰＴ（サイコセラピー）機器が置かれている上に常駐する助手、ひっきりなしに出入りする助手などの存在で落ちつけなかった。時田浩作の研究室も同じような状態であることは確かだった。

研究室に戻る途中、廊下へのドアを開け放したままの総合診療室の中で四、五人の職員が津村という職員を取り囲み、何やら大声で騒いでいるのが窺えた。時田が「恐慌」と表現したのがこのことなのだろうと敦子は思った。職員たちの様子はたしかに恐慌を来しているとしか言いようがなかった。津村はナチス式の敬礼のように右腕をななめ上にさしあげたままであり、彼を取り囲んで口論している職員たちの中にも腕をさしあげている者がいた。あんな騒ぎになる筈がないと敦子は確信し、人為的なものを感じた。

研究室では柿本信枝という若い助手が頭部にヘルメット状のコレクターを被り、ディスプレイの画面を覗きこんで、隣りの診療室で寝ている患者の夢をモニターしていた。敦子が入ってきたことにも気づかず、眼がうつろだった。

敦子はいそいで画面をストップさせ、バック・スキップのボタンを二、三度押した。突然の消去は彼女が患者の無意識の中に取り残されるおそれがあり、危険だった。画面は患者が見ていた夢をさかのぼりはじめた。

「あら」自分に戻り、柿本信枝は少しあわててコレクターを脱いだ。敦子に気がつき、彼女は立

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ちあがった。「お帰りなさい」
「危ないところだったのよ。わかってるの」
「すみません」患者の夢にのめりこんだ自覚がないようだった。「客観的に見ていたつもりだったのですが」
「いいえ。逆侵略されていたわ。夢の検索に長時間コレクターを被るのは危険なのよ。言っといたでしょ」
「はあ」不満げに、信枝はうわ眼で敦子を見た。
敦子は声を出して笑った。「あなた、わたしの真似をしたんでしょう。ちょっと半睡眠の状態になったりして」
隣りの自席に戻って非常に不本意げにリフレクターのモニターだけを見ながら、柿本信枝は悲しそうに言った。「先生にできるのに、どうしてわたしにできないんですか。訓練不足だからでしょうか」
真相は決定的に、柿本信枝の精神力の弱さにあった。セラピストになれる程度の精神力はあっても、患者の夢を共時体験したりその無意識へ感情移入したりすることに向かず、そんなことをしたりすれば患者の無意識の中に捕えられたまま現実に戻ってくることができなくなる者もいるのだった。
「そうかもね。とにかく気をつけて頂戴。津村君なんか、そのリフレクター見てるだけで患者の関係妄想に影響受けたのよ。聞いたでしょ」
「ええ」

隣室の患者は六十歳前後の男性で、数十年前の都心部と思える繁華街の夢を見ていた。事実はどうだったのだろう。患者の夢に見られているその繁華街は猥雑で、潤いがなく、荒廃していた。コレクターによって患者に感情移入すれば、その繁華街は極めて居心地のよい、好ましい場所であるに相違なく、むしろ清純さにつながる彼の青春時代のエロチックな願望に結びついているのかもしれなかった。あるいはまたその風景は、患者が社会と親しい関係にあった過去にさかのぼり、世の中とのつながりをとり戻そうと努力しているあらわれなのかもしれなかった。

津村君を呼んできて、と、柿本信枝に言おうとした時、小山内守雄という若い職員が入ってきた。美貌であり、博士号もとっている未婚の医学者だから所内の女性職員の噂の的だったが、研究そっちのけで政治的に行動するため評判はよくなかった。柿本信枝もこの小山内を嫌っているようだった。

「千葉先生。津村君のことですが、やはり彼自身の問題というより、リフレクターに原因があるんじゃないんでしょうか」

「勿論そうです。リフレクターをいじらなければ津村さんがああならなかったことはたしかなことですからね」

「はあはあ。つまり、リフレクターをいじっても患者の関係妄想に影響されないセラピストもいると」あんたの反論くらいは予想できているのだと言いたげに、小山内は笑みを浮かべてうなずいた。

「わかってるのなら言うことないでしょ」敦子をほとんど信仰している信枝が吐き捨てるように言った。

低水準の議論はしたくなかった。敦子はわざと噛んで含めるように言った。「この研究所の、現在やっている研究の原則を忘れないでね」

「PT機器の開発。それはよおくわかってるんですがね。ぼくは分裂病の患者の無意識をイメージとして観察した場合の実際の効果についてお話ししているんです」信枝などまったく無視し、小山内は敦子を真似てわざとらしくゆっくりと言った。「分裂病の患者は神経症の患者みたいに無意識を偽装させているんじゃなくて、すでに無意識をそのまま声高に語ったり、そのまま演じたりしているわけです。さらにその上その無意識を覗くことに何か重大な意味があるとは思えないんですがね」

「でもその無意識は、分裂病患者の無意識なの。だからシニフィアンとシニフィエとの異常な結びつきかたを調べなきゃならないでしょうが。あなたの言うように患者は無意識をそのまま喋っているわけだから、そのことばがどんな意味と結びついているのか、それはやっぱり無意識を覗かなきゃわからないでしょう」

敦子は馬鹿馬鹿しくなってきた。小山内は自分の言うべきことを喋ってしまったあと、敦子の言うことなどまるで聞いていないという風を装ってにやにや笑いながら窓の外を眺めていた。窓の外には数百坪の芝生があり、その彼方には研究所の塀を隠すための木立、さらにその彼方には都心部の高層ビルが林立している。

「ま、それは千葉さんの理論であって」そんな理論など認めないというように小山内が言った。

「ちょっと待ってよ」敦子は怒りをこらえて言った。怒りをこらえることは優秀なサイコセラピストでもある敦子の自己訓練によるものだった。「ただの理論じゃなく、理論の基礎です。しか

も実証され、認められている理論です。なぜ今ごろあなたにこんなこと講義してあげなければならないのかわたしにはわからないわ。もういいから、津村君をつれてきて頂戴。わたしが治療します」

小山内が真顔になった。辛辣なことばの応酬で敦子にかなう者はいないということを思い出したようだった。「いやいや。千葉さんをわずらわせるほどの重症じゃありません。津村はぼくや橋本がなおします。友人ですから」

小山内はそそくさと出ていった。分裂病の伝染などという噂を広めた元凶は小山内に違いないと敦子は思った。ただ、リフレクターの危険性を、退けられるとわかっていながら今さらのように敦子のところにまで言い触らしにくる彼の意図が敦子には不明だった。

「なおすだけでは駄目なんだけどなあ」敦子はつぶやいた。「津村君をいちどじっくり分析してみないと」

「あのひと、津村君が先生に簡単になおされてしまったり、分析されたりするのをひどく恐れているみたいでしたね」柿本信枝がそう言った。

2

島寅太郎は所長室のデスクから立ちあがり千葉敦子を応接セットの肱掛椅子にすわらせると、自分はそのななめ右隣り、ソファの隅にかけて、ほとんど身を横たえるような姿勢でくつろいだ。そのため島所長の顔は敦子の顔のすぐななめ下に位置することとなり、顔をあげさえすれば間近

から敦子の美しい顔を鑑賞することができるのだった。島寅太郎は自分が千葉敦子の讃美者であることを隠そうとしなかった。
「小山内君が来ましたろう」
「あら。彼、ここへも来たんですか」じゃ、わたしのところへ来るよりも早くここへ来たんだわ、と、敦子は思った。
「研究所内の研究者すべてがあなたの理論に従い、あなたがノーベル賞をとるための手伝いをすることはない筈だなんていきまいてましたよ」笑いながら島所長は言った。
「やっぱり津村さんのことで来たんですね。PT機器への疑問、ながながとやりませんでした」
「いくら反対したって、それで回復した患者がいるんだからどうしようもあるまいに」島寅太郎はちょっと眉根に皺を寄せた。「実際に、寛解期にまでこぎつけた患者は半数に及ぶわけで、どこの病院でだって入院している分裂病患者の半数が回復期にあるなんてことは今までなら想像もできなかったことだ。そうでしょうが千葉先生。これはもうあなたの理論が正しいとしか思いようがない」
「ほとんどはPT機器を開発した時田先生の功績で、わたしはそれを利用しただけで。ああ。それから所長。寛解期の患者は現在、入院している分裂病患者の約三分の二になりました」
「ああ。そうでしたな。それはまあ結構なことなのだが」島所長はしぶい顔をした。「寛解期の患者というのは、なんで自分が入院している病院の院長にああいう具合に同一化する者が多いのですかね。中にはわしの真似を極めてグロテスクに、平板にやる者がいる。あれは見ていて実にいやな気持のものですな千葉さん」

「あれはいわゆる『粘土のような易傷期』という時期の患者で」敦子は大声で笑いながら言った。「超越論的な自立をもとめているんですわ。たいていの医者や看護婦は患者に真似されています」

敦子の笑う様子をうっとりと眺めていた島寅太郎はふとわれにかえり、やや気づかわしげに質問した。「小山内君から不愉快なことを言われませんでしたか」

敦子は平然として嘘をついた。「いいえ別に」

「彼はPT機器の使用が医者に及ぼす影響を何やら難しいことばで言っておりましたな。そんなことなら千葉さんに言ったらどうかと言ってやったんですがね。君には彼女に直接それを言う勇気があるかと言ってやると、では言いますと言って憤然として出て行きおりましたが、あなたに悪いことをしたかもしれんと思ってね。しかし何しろわたしは古いタイプの精神科医でね。最近の新しい理論にはついて行けんので、そう言うよりしかたがなかった」

「いいんですよそんなことは」千葉敦子は、立派ではあるが、現在世界中から注目されている研究所の所長室としてはやや貧弱な室内を見まわした。

所長室は渋く古風な造りで広く、三方の壁は書棚であり、古典的な精神医学の書物が並んでいた。クレペリンまでが原書で置かれていたが、最近の本はまったく見あたらなかった。少し本を入れ替えるべきではないのか、来客にあたえる印象を恐れ、敦子はそんな心配をした。

「あの小山内さんというひとは、何かたくらんでいるようです。気をつけてください」人の好い島寅太郎所長の地位を案じ、敦子は言った。「もちろん小山内さんひとりで何もできる筈はありません。黒幕がいて、失敗の既成事実を作らせようとしているんでしょうけど」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.